氏　　名	**金　　太 宇**
学位の専攻分野の名称	博 士（社会学）
学位記番号	甲社第54号（文部科学省への報告番号甲第541号）
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位授与年月日	2015年２月16日
学位論文題目	**廃棄物管理をめぐる制御と抵抗の環境社会学的研究** **―中国・瀋陽市における周縁を生きる人々の日常実践と交渉過程から―**
論文審査委員	（主査）教 授 古 川　　彰 （副査）教 授 三 浦 耕吉郎 教 授 陳　　立 行 土 屋 雄一郎（京都教育大学准教授）

論 文 内 容 の 要 旨

本論文「廃棄物管理をめぐる制御と抵抗の環境社会学的研究」は、現代中国社会の廃棄物処理をめぐる、社会空間と制度的構造の特質、そしてアクター間の対応や行動に着目しながら、廃棄物処理における制度と実態のズレがどのように生成し変容したのかを考察することを大きな目的としている。具体的には、周縁を生きることを余儀なくされ貧困や経済格差に苦しみながらも、「ごみ」と「空間」を介して粘り強く生活を組み立てなおしていく人々の日常実践に焦点を当て、廃棄物管理の制御への「抵抗」と、政策とシステム設計がカバーできない廃棄物処理の領域を補う過程を、およそ５年間のフィールドワークを通して実証的に提示した。

本論文においては、中国・東北部に位置する瀋陽市を調査対象地として選定し、都市部、都市周辺、農村部の３つの地域における廃棄物処理の実態調査をおこなった。上記の３つの地域を調査の対象として選んだ理由は、ひとつの地域における廃棄物処理をめぐる問題を全般的に取り上げることによって、これまでの中国のごみ問題の研究におけるメゾレベルの空白を補填するためである。そして、上記の３つの地域において生活し活動している「回収人」と「拾荒人」、そして農民が、ごみ処理といかに関わってきたのかに焦点を当てている。ごみのリサイクルにかかわる農村出身者が多数を占める「回収人」と「拾荒人」と、ごみの末端処理に直接に関わっている農民に共通するのは、いずれも中国社会において社会的・経済的周縁を生きていることにある。

本論文は、本文の５章と、序章、終章による全7章で構成されている。序章において、本論文を貫く枠組みである、ごみ問題における「政策論」（政策の論理）と「生活論」（生活の論理）の両次元の関係に注目しながら、「政策やシステム設計によるごみ問題の解決」が社会における周縁を生きる人々に対する抑圧・排除を生み出す側面を示す。そのうえで、廃棄物管理に伴い排除される人々の生活現場で汲み上げてきた問題を「政策論」で用いられる合理性との対比から、ごみ問題を検証していくことの重要性を指摘する。

さらに、周縁を生きる人々の「生活論」からごみ問題を検証していく際に、廃棄物処理の管理空間を規定する制度的構造、ごみが処分、リサイクルされている「空間」、廃棄物処理にかかわるアクターの相互関係に留意する必要があることを提示する。こうした分析枠組みを用いた理由は、マクロレベルの社会構造や制度･政策の分析とミクロレベルの個人行動や組織関係の分析を、「空間」配置として読み替えることによって、

いままでみえてこなかった中国社会のごみ問題を可視化するためである。そして、こうした問題意識と分析枠組を踏まえ、序章では次のような具体的な検討課題を設定している。第一に現代中国の廃棄物処理における制度と実態のズレがどのように生成し変容したのか、また第二に、このズレを人々がどのようにして修復してきたのか、そして第三に、この修復の行為は社会主義制度とどのような関係に置かれてきたのかを明らかにすることである。

第１章では、中国のごみ問題の生成史と廃棄物政策の形成過程を整理することで、公衆衛生思想、グローバル環境主義、市場経済主義の思惑にもとづく廃棄物処理の制度化が、必ずしも生活者の立場に立脚した政策形成ではないことが明らかにされる。

第２章では、瀋陽市農村部における処分場建設をめぐる紛争の事例から、農村部を対象にした廃棄物処理の制度化が、あくまでも行政の立場からの「政策論」的合理性にもとづいたものであり、対象地域の人々の「生活論」が制度設計の段階からすでに軽視・除外されていることが明らかになる。

第３章では、瀋陽市都市部における回収業者の活動実態に対する考察をもとに、リサイクルシステムの構築において、既存の回収業者の立場（生活論）が無視され、農村出身の「回収人」が自身の権益を守るために、ゆるやかな反発と「抵抗」を選択した様相が示される。そしてこの「抵抗」によって、「回収人」の正規／非正規、再生資源の国家主導のリサイクルシステム／業界主導のサブ・リサイクルシステムの対立図式が生み出されていることが明らかになる。

第４章では、瀋陽市周辺のごみ山で活動する「拾荒人」の生活実践に対する観察を通して、廃棄物管理の構造的矛盾によって繰り返し形成されるごみ山が、「拾荒人」に生活と活動の場を不断に提供していることが明らかになる。さらに、ごみの「処理」に携わる人々の活動は、廃棄物処理の秩序を維持するための、いわばシステムの「調整弁」という役割を果たしており、これまでの廃棄物処理の欠陥を補ってきたことが示される。

第５章では、農民の越境移動の歴史と軌跡、都市－農村関係の変遷を検討することによって、周縁を生きる人々が廃棄物管理の権力に「抵抗」する場を創造していくプロセスと、彼／彼女らの生活実践が「生活論」にもとづく、廃棄物管理の制御への「抵抗」であることが提示される。

終章では、全体を通しての考察の結果が提示されている。第一に、廃棄物処理における「政策論」と「生活論」の乖離、「二元的社会構造」にもとづく政策形成と空間の近代化の齟齬が、制度と実態のズレを生成し変容させている。つまり、廃棄物処理における制度と実態のズレは、「生活論」の「主体」が欠如した制度設計、硬直化した廃棄物処理の制度空間と変容する都市 - 農村の空間構造との不一致の結果である。第二に、こうした廃棄物処理における制度と実態のズレは、数多くの周縁を生きる人々によって補われており、ごみ問題によって生じる社会的緊張を和らげている。第三に、周縁を生きる人々による廃棄物管理の制御に対する「抵抗」が、国家によって構造化され続けている貧困から抜け出すための実践である。それは、周縁を生きる人々が社会的に貶しめられている立場を反転させることへの強い願望に裏打ちされている。

さらに、終章の最後の部分では、環境社会学の研究領域における「公共圏」の確立とその豊富化に関する議論を展開している。環境問題の解決論の要諦とされるこうした議論が、周縁化されてきた「生活者」の存在を排除した「公論形成」にもとづく廃棄物処理政策が、制度と実態のズレをいっそう拡大させ、さらなる抵抗を生み出すことにつながりかねない側面を指摘する。

以上のフィールドワークのデータに基づく詳細な記述と分析を通して、ごみ問題は、トータルな生活世界のなかに埋め込まれており、たんに衛生問題、環境問題、経済問題だけでなく、社会構造にかかわる貧困問題、格差（差別）問題などでもあることが明らかになる。

論文審査結果の要旨

本研究は、現代中国における廃棄物管理問題について、制度と実態のズレに焦点をあて、「政策論」と「生活論」を方法的な軸として実証的かつ批判的な分析を試み大きな成果をあげた骨太で独創的な論考である。また本研究は、中国・瀋陽市およびその周辺農村での５年にわたる困難なフィールドワークを継続するなかで記述された優れたモノグラフでもある。

本論の社会学的意義のなかで、もっとも独創的なものは以下の点にある。それは、(1) 先進的な技術の導入や管理システムの構築といった、合理性を優先した行政の諸施策が、中国社会に独特な都市／農村の「二元的社会構造」やそのなかで進展する農村の都市への編入による都市地域の拡大という実態と大きく乖離している点を明らかにしてみせるとともに、(2) 政策論やシステム設計によってはカバーされていない廃棄物リサイクル過程の一部を実質的に担ってきた「回収人」や「拾荒人」といった都市周縁を生きる人びとの存在に光をあてた点である。

中国における廃棄物処理に関わる研究は、まだ緒についたばかりであり、またその研究は政策の側から制度設計に焦点をあてた研究に支配されている。それらの研究では、廃棄物処理には不可欠でありながら制度からは排除されてきた、「回収人」「拾荒人」（農村出身者が多数を占める）と呼ばれる人びとは、無視されるか制度設計上の一時的なミスとみなされてきた。しかし日本の社会学とりわけ差別研究や環境社会学的研究においては、こうした視点ははやくから厳しく批判され、1980年代にはこうして周辺化された人びと（マイノリティ）を抵抗と創造の主体とする見方も登場し、それ自体もその後は批判の対象となってきた。また1990年代以降の環境社会学研究においては、公論形成による公共圏の豊富化という議論がそれと並行して展開されてきた。

本研究は、こうした中国の政策論的視点および日本の抵抗と創造の主体論、公共圏論などの研究史を批判的に検討することで、周辺を生きる人びとの錯綜した生の可能性と限界を考察しようと試みている。筆者は、抵抗と創造の主体でも制度設計上のミスでもない、社会の構造的弱者が試行錯誤を繰り返しながら貧困から抜け出そうとする日常的生活実践とその場における生活の組み立て方（生活論）に着目する。その生活論の視点からは、周辺化された生活者の存在を排除した「公論形成」にもとづく政策こそが制度と実態のズレを拡大し、さらなる周辺化が引き起こされることが明らかにされる。

次に本研究の方法論的な意義について述べておこう。このテーマに関する中国での先行研究自体が非常に少ないことの背景には、社会主義国家体制において政府や行政の施策にたいして批判的研究を行うことの困難性、および、「回収人」や「拾荒人」といった施策や社会から露骨に排除されてきた人びとにたいする調査研究を行うことの困難性があげられる。本研究では、さまざまなルートをたどりながら、2009年から2014年にかけて瀋陽市を中心に行ったフィールドワークにおいて「回収人」「拾荒人」と接触し、出会いを重ねて、彼／彼女らの生活現場をフィールドとして包括的で統合的な調査を実施した。このような方法論的立場にたってはじめて、制度だけからでもなく、被害や抵抗の論理だけからでもなく、彼／彼女らの生活実態と貧困の総体に迫ることこそが、中国における廃棄物問題解明の鍵であることを明らかにし得た。

それと同時に、こうしたフィールドワークを通して、「回収人」「拾荒人」らが制度の変更による度重なる排除をくぐり抜けながら、そして空間的にも流動を繰り返しながら総体として自らの生を形成していく過程が、たとえば「俺の人生はごみのようで、ごみは俺の生活だ」という老「拾荒人」の言葉を書きとめることによって鮮明に描き出された。彼／彼女たちの実態を通して、これまで中国の廃棄物処理の研究で前提とされてきた制度とその外部という図式とはまったく異なる、それ自身が内部でありながら排除されざるを得ない現実がそこにはあることが確認できた。同時に、その現実は、彼／彼女たちが意識的にそうした生活を抵抗や文化創造の手段として選択し主体的生を確立しているという、1980年代以降のマイノリティ研究が描き

出してきた姿とも明確に異なるものであった。

こうして本研究は、「回収人」「拾荒人」たち周縁を生きる人々が社会的に貶しめられている立場を反転させることへの強い願望をもちながらも、それだけを志向するのでもなく、同時にもちろんそうした周辺化された生活を主体的に選択しているわけでもないことを明らかにした。そのため「回収人」「拾荒人」たちの生活世界は、ときに社会性・共同性を追求し、ときにはそれを意図的に切断回避しながら形成されるのである。しかし、その存在自体は根源的に制度外におかれているために、「公論形成」にもとづく廃棄物処理政策でさえも、制度と実態のズレをいっそう拡大させ、さらなる抵抗を生み出すことにつながるという側面を指摘することに成功した点においても、中国における廃棄物処理研究史にあらたな展望を開くものとして評価できる。

とはいえ本研究に問題がないわけではない。まず、分析軸として政策論にたいして生活論に立脚するとしているのであるが、資料も議論も不十分であるため、その生活論が実態としても分析枠組みとしても必ずしも説得的でない。人びとの生活は多かれ少なかれ政策との相関として表れざるを得ないのであり、説得的に展開するためにも、政策論と生活論を対立的に見るのではなくそれらを接合する論理も必要であろう。また、本論の主題である制度と実態のズレを描く際に、社会学における抵抗と創発性の研究史的な議論が十分ではないため、ときとして被差別者を抵抗の主体として美化して捉えようとする個所が散見される。それは、ひとつには意識的であれ無意識的であれ形成されているはずの彼／彼女らのコミュニティについての調査・分析が十分にはなされていないことにも由来するだろう。また、制度と実態のズレというときの「ズレ」そのものが構造的に必然的なものとして存在することが、廃棄物処理システムだけではなく不平等社会の本質的な問題であり、この議論を「中国」の「廃棄物問題」に押し込めずより広汎な社会問題分析へと展開していく視点も今後の課題となろう。とはいえ、長期にわたるフィールド調査よる記述と知見は独創的であり、こうした問題点も本論の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年１月20日、審査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、本審査委員会は、金太宇氏が博士（社会学）の学位を受けるのに十分にふさわしいとの結論を得たのでここに報告する。